

2009年3月29日
月心会 西東京本部 浜田山支部
畠山耕治

「空手の練習を通して一番辛かったこと」

空手を見たことも、したこともない私をここまで育てて下さった宗家ならびに西東京本部長、浜田山支部長に対し、心より御礼申し上げます。

学生時代は体育会運動部に所属し、身体を動かすことが大好きだった私も、会社に就職すると同時に一切運動をしなくなり、また、子供に恵まれながらも出張や残業で家族と十分なスキンシップを取ることができない状況が15年続きました。そのような状況の中、月心会の空手と出会いました。「親子で成長していくことができる空手」、それはこれまでの私自身の反省点を全て改善できる唯一の「秘策」に映りました。早速子供とともに入会させていただき、練習が始まりましたが、時を同じくして会社がある会社と合併することになり、これまでとは比較にならない程の仕事をこなさなければならなくなりました。自らを省み、自らを鍛え、子供や家族とのコミュニケーションを取り戻す、そのような決意で入会したことから、仕事を理由に練習を休むことはできないと理解しつつも、月に3回程度しか練習できない状況が続きました。今から思えば、入会させていただいてからの約1年間、「仕事と空手を両立させていくこと」が私にとって最も辛いことであったように思います。十分な練習ができない状況でも本部長をはじめ、支部長、黒帯の皆様からとても熱心にご指導を賜り、帯の色も順調に変わっていきました。入会から1年くらい経ったある日、支部長から頂いたある言葉をきっかけに、「子供とのコミュニケーションの為ではなく、自分が、子供が、それぞれに空手の上達を目指して練習をしている」ことに気がきました。これまでの1年間を無駄にしてしまったとさえ感じ、気落ちしたことを今でもはっきりと覚えています。

振り返れば、入会させていただいてからの約1年は空手を上達したい、という意欲に欠け、練習日に仕事が重ならないような努力を十分にしてこなかったように思います。「子供とのコミュニケーションなら空手の練習以外でもできる」「運動なら通勤途中の歩数で稼げばいい」、本末転倒な都合のよい自己解釈に甘えていました。

そのような私も週に2日は練習に参加させていただくようになり、現在に至っています。空手を通して自分に磨きをかけ、人として尊敬されるような人物になりたい、今はそのような気持ちで練習に励んでおります。そして、同じ空手道を志す家族5人で切磋琢磨しながら共に支え合い、成長していきたいと思っております。